

これからのことを…4の(15)

●方丈記を読んできて(2)

東京大空襲



方丈記から感じたこと

前回、方丈記が800年も読み継がれていることの意味がわかると書きました。

時代、状況が非常に違っても成り立つのですね。特に、戦後の混乱期、東日本大震災の時、そしてこのコロナ禍の時とここまで書いてきて、堀田善衛(作家1918~1998)の「方丈記私記」を読み始めました。上記のことをどれだけ理解して書いていたのだろうかと思いました。

恥ずかしい限りです。
明日はどうなるのか…

1945年3月10日の一夜にして10万人が亡くなり、東京都の4割が焼失した東京大空襲を27歳で経験し、その直後方丈記を暗誦出来るほどに読んだという彼は五

大災厄の所で最も痛切に迫ってきたのは福原遷都の『古京はすでに荒れて〜』だと言います。一体明日は、前途は如何なることになるのかと。

福原遷都を

『治承4年水無月のころ、にはかに都遷り侍りき、いと思ひの外なりし事なり。この京のはじめを聞ける事は、嵯峨天皇の御時、都と定まりにけるより後、すでに四百余歳を経たり。』

これは一度簡単にたよりに書きましたが、源氏と平氏の争乱の中で、力を持った平清盛が自分の住まいを持つ福原(

今の神戸)に1180年6月2日遷都したのです。都は400年と長くも京にあったので、誰もが不安でいっぱいになりました。しかし、あれこれいってもどうにもならず、3歳の安徳天皇をはじめ、大臣、公卿、みなことごとく移って行きました。世に仕えて生活をしているような人は、誰一人、旧都に残っていることはできません。機を失い、世の中からはずれて、何のあてもない人は愁え嘆きながら旧都にとどまるしかありませんでした。全ての人の心が不安でいっぱいです。

『軒を争ひし人の住まひ、日を経つつあれゆく。家はこほたれて、淀河に浮かび、地は目の前に畠となる。』

軒を争っていた人々の住居は、日を経るにつれ段々と荒れてゆき、沢山の家は取り壊されて、筏にその材木を乗せて淀川で運びました。宅地は目の前で畠に。特に6月は少雨で川が干上がっていたそうです。

長明さんはまた出かけて
『その時、おのづから事のたよりありて、〜』
と、例によって長明さんは摂津の新



淀川

しい都に行きました。形状を調べたら、土地は面積が狭く、京のように区画を割り当てるのに到底不足し、北は山沿いで高く南は海が近く下って、波の音がやかましく、潮風



神戸

が強いとその様子を。初めから福原にいた者は土地を取り上げられ困りはて、新しく入ってきた人は土木工事で苦勞している姿が目。都の趣は変わり果て、田舎の武士のようなふるまいが目につくと長明さんは嘆きます。

戦時に生起することほとんどについて思い当たることか

『古京はすでに荒れて、新都はいまだならず。ありとしある人は、皆浮雲の思ひなせり。〜』

堀田善衛一体明日は、前途は如何なることになるのかと。

空襲跡に立つと、あの『古京は〜』が頭に去来したと言います。「戦時日本というものがいつまでも続く筈のものではない。〜明日の新たなる日本の映像がどうしても、うまく眼に見え

八幡まるごと館だより

2021年9月7日/142号

<発行>八幡まるごと館/八幡市男山松里12-20
(TEL&FAX) 075-983-3664(9時~17時)
(E-MAIL) yawata@marugotokan.net
ホームページは <http://marugotokan.net/>
又は、八幡まるごと館で検索して下さい



八幡まるごと館は街行く人のだれもが自由に立ち寄れる“地域サロン”です。休館日は毎週火曜日全日と土・日午後です。

て来ない…。これは当時を生きた人誰もが感じていたことではないでしょうか。そして、765年前あわただしく福原に向かった人たちの姿から否が応でも疎開とそれともなう面倒が、行けず旧都に残った人には疎開に行く宛ない人々が重なって見えたと言います。また、遷都のため壊された家は、防火用で強制破壊された情景とそのもろもろに重なり、その後は同じく耕されかぼちゃ畠に。方丈記の大風、火災、飢え、地震などの描写が凄まじいほどの的確さをもっていることに深く打たれ、長明さんに対する親近感はそのような具体的な所からできていて、今も近くにいます。

『古京は〜』からは「歴史というものがあるからこそわれわれ人間が持たなければならぬ不安を、つまり歴史はそういう形でしか人々の眼前に現出することができないのだ」と。実際に戦禍に遭って精神的・内面的な処し方に何か根源的に資してくれるものがあると書きます。

読み継がれた古典を糧に

私はこの「方丈記私記」を読むまで、戦時体験をされた方が方丈記をそのように読まれていることを想像さえしてなかった。その場面場面を頭で描くだけで如何に読みが浅いかと。この作者のように方丈記が傍で寄り添ってきたんですね。800年もの間多くの人に。そのことを忘れないでおこうと思いました。

「知らせぬは当局者、知らせぬは国民のみ」は戦時中の大本営陸軍部の日誌なんです。現在のコロナ禍も色々な面で似ていると。戦時中と同様、ほんとうのことがわからないし、一体明日はどうなるんだらうかと、暗い闇夜にいるようで、気持ちと気持ちが離れ、疑心暗鬼に。

でも、その流れに決して乗せられないで、想像力を働かせて、人と人が相手を慮ってつながることに力を使おうと思っています。そのために、この800年も読み継がれた方丈記が手助けしてくれるのではと。もしかすると一人ひとりの「方丈記私記」ができるかもしれません。子どもや孫の未来に少しでも希望が見えるように。

「方丈記私記」から

「焼け出されて着のみ着のまま、焼けて生身の露出した襦袢(ぼろきもの)をまとった人々、あるいは最小限の荷物をもって逃げ出して来た人々とすれちがいはじめた。～火と煙で眼をやかれ、痛めつけられたのである。～新橋近くになって来ると、黒焦げの屍体も眼につき、～私たちはブリキ製の細長い管のような焼夷弾の燃えガラを蹴とばしながら歩いて行った。～」と焦土を歩き、これからどうなるのかと、方丈記をくりかえし何度も読んだそうです。

私はこの「方丈記私記」を読み、方丈記に対する気持ちが深まったように感じています。

オカリひまわり

<8月にこんなことをしました>



と思われる方だけの参加ということ。どうか時々まるごと館に

30日 この日は8人で練習をしました。参加者で話し合い、しばらく全員での練習を見合わせようと決めました。また全員で出来るようになれば連絡を致します。それまでは、ちょっと練習したい

お越しく下さい。落ち着いて皆(全員で20人)で練習出来る日が訪れることを願っています。その時はどこかからコンサート依頼が飛び込んでくるかもしれないですから、時々オカリナの練習もして下さいね。

八幡まるごと館 9月・10月の予定

休館 10月11日(月)

<パソコン教室>	毎週月曜日 10時～12時です
9月6日(月)10時～12時	パソコンを持って来て下さい。費用 300円(コーヒーつき)
<オカリクラブ ひまわり>	楽しめる時に
9月6日(月)13時～	参加費100円 全員参加ではありません 練習日は月曜日だけに
<絵手紙講習会>	
9月8日(水)午後1時30分～	講師 森本玲子さん 参加費 400円(コーヒーつき) 次回は10月13日(水)です
<楽しい理科の実験 N040ポッフアップカード>	持ち物 カッター、ハサミ
9月24日(金)13時30分～	講師木下章司さん 参加費300円(コーヒーつき)
<歴史を学ぶ 新八幡の歴史 N032>	わかり次第連絡いたします
10月中3時30分～	講師出口修さん 参加費100円 月1回です
<パッチワーク・かわいロボジェット>	定員になりました
10月14日(木)13時30分～	講師 西角千代子さん 持ち物 裁縫道具、ハサミ、鉛筆、さし 参加費1500円(コーヒーつき)

<あんなこと・こんなこと>

- * コロナ禍で宣言が出され、また講習会の延期や縮小が続いています。中々顔を合わせてということができません。この状況では学校では人との関係が中々築けませんし、病院や施設では会えない苦しさ悲しさが。高齢で家という方も多数おられるのではないのでしょうか。長期化すればするほど苦しくなってきます。何かできることがあればと。
- * 方丈記をもうしばらく続けます。声をかけて下さる方が少しずつ増えて力をいただいています。感謝です。同じことを何度も書いたり、まとまっていないのに

よく読んで下さいました。今回の「私記」から方丈記の魅力が引き出されたような気持ちになりました。もっと深く読み取れるようにと反省しています。本文でも書きましたが、今の風潮に流されないで(うっかりすると巻き込まれてしまう)歩んで行こうと思っています。今回は字数字幅とも変えました。以前は詰めて書いていましたから少しは読みやすくなったかなあと思います。(うえたに じゅんこ)